

又蕎をなづなとよめるは心得がたし、

〔古今要覽稿 菜蔬〕なづな○中略

正誤○中略

按になでしこのなでは、いかに愛する意なるべけれども、なづなのなづも、それと同じ意とせしは心得がたし、もしその讀を主張していは、なづなは撫菜にて、齋宮の忌詞に、打を撫といへり、此菜を七日の粥料に用ゆるには、組板の上に載て、打はやすものなれば、打菜といふべきを、なづなといひしは、かならず命名者の心せし名なるべしなどいはんに、たしかなるべきにや、

〔枕草子三〕草は

なづな、ならしばいとおかし、

〔曾根好忠集〕三月をばり

みそのふのなづなのくきも立にけり今朝の朝なに何をつま、し

〔散木弄詞集春一〕人のもとへわかなにそへてつかはしける

君がため夜ごしにつめるな、草のなづなの花を見てしのびませ

〔本朝食鑑三〕柔滑、蕎和名訓奈都、今亦同、

集解、蕎有大小而一物也、但大者有毛爾處處田野庭園俱多有之、冬至後生苗、其葉著地形如蒲公英、而

葉尖有深刻鋸齒、向下采之作蔬茹、二三月生莖五六寸、開細白花、整整如一、結莢如小萍、有三角、莢内

細子如葶藶子、本邦正月七日嘗七種菜粥、以蕎爲一種、近世用蕎菜餅子作粥、是未識何用也、

〔本朝食鑑三〕華和異同、蕎

今所用之蕎者、李時珍所謂小蕎也、或曰、近代以蕎子爲葶藶子者、訛焉、事詳子綱目、

〔農業全書四〕なづな、蕎